

# 近い将来、南海トラフ地震は必ずやってくる

地震調査研究推進本部(文部科学省研究開発局地震・防災研究課)によると、南海地震の発生確率は、今後30年以内で70~80%程度、50年以内は90%程度にも及んでいます。近い将来、必ず発生する南海地震について、備える時が来ています。

今後30年以内に南海トラフ地震が発生する確率は70%~80%程度

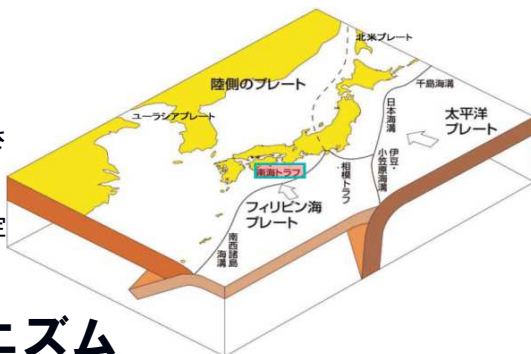


50年以内  
90%程度

四国の南には、海側のフィリピン海プレートが、陸側のユーラシアプレートの下に沈み込むことによってできた『南海トラフ』があります。この南海トラフの北側で、南海地震などの巨大地震が発生しています。

南海地震は、100~150年程度の間隔で発生していることから、今後30年以内に発生する確率は70%程度と想定されています。なお、直近の南海地震(1946年発生)は平均より小さかったことから、次の発生までの間隔は、過去の平均発生間隔(114年)より短いとも推定されています。

地震の歴史を考えると、南海・東南海・東海地震は連動して発生する可能性があり、被害も甚大になると想定されています。



## 海溝型地震の発生メカニズム

海側のフィリピン海プレートが、地殻変動により、陸側のプレートを引きずりこみながら移動し、限界を超えると、ひずみが解放されて、巨大地震や、津波を引き起こします。

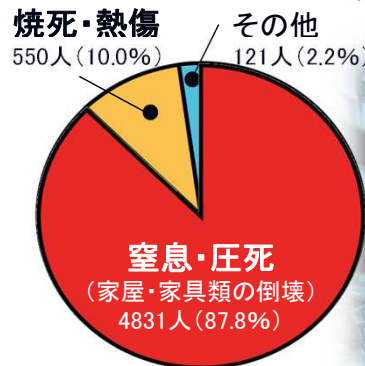


## 南海トラフ地震の歴史

地震名	発生時期		南海地震	東南海地震	東海地震	地震規模
慶長地震	1605年	約400年前	●	●	●	M7.9(3連動)
宝永地震	1707年	約300年前	●	●	●	M8.6(3連動)
安政地震	1854年	約160年前	●	●	●	M8.4(3連動)
東南海地震	1944年	約70年前		●		M7.9
昭和南海地震	1946年		●			M8.0
空白域(地震の発生していない期間)			約70年		約160年	??

## 阪神・淡路大震災の教訓

死者の9割以上が、家屋や家具の倒壊による**圧死・窒息と焼死**

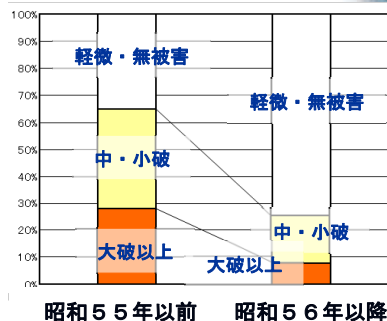


阪神・淡路大震災では、建物の倒壊や家具の下敷きとなったことによる死亡者が、全死亡者の8割以上、地震後の火災による死亡者が1割でした。また、建物の倒壊により、避難や、救助のための道を塞いだ事例が多くありました。建物の耐震化や、家具の固定等が、減災の大きなポイントであることがわかっています。

阪神・淡路大震災の死亡者の原因  
警察庁『警察白書(平成8年版)』

耐震基準を満たさない**昭和56年以前**の建物に**被害が集中**

建築物の被害状況



阪神淡路大震災建築震災調査委員会(国交省)中間報告(平成7年)

・阪神・淡路大震災においては、約25万棟の住宅が全半壊するなどの甚大な被害を受けましたが、木造・非木造ともに昭和56年以前に建築された建築物に多くの被害が見られた一方で、新耐震基準の建築物の被害は少ない状況でした。